聖霊に助けられて
福音を語る

使徒言行録2章1～13節
2021年5月23日
松田 基子 師

今日はペンテコステです。 その意味は、第五十という意味で、過越祭から50日目に設けられたユダヤ人の祭りの日です。 旧約聖書では七週祭、小麦刈りの初穂の祭とも呼ばれた、収穫祭です。 この日がキリスト教にとって、大きな意味を持つようになったのは、イエス様が昇天されて後、この日に聖霊が降って来られた事により、聖霊降臨日を、ペンテコステと呼ぶようになりました。 今朝は、創造主なる神様の、人類救済史において、**聖霊降臨がどの様な意味を持つのか**を聖書に聴いて参りましょう。

先週は、モーセの死について学びましたが、神様は、エジプトの奴隷となっていたイスラエルを、先祖アブラハムとの契約を基に、モーセを指導者に立てて、エジプトの絶対的権力の束縛から救出して下さいました。 それは人間の力では及ばない、神様の奇跡によって可能となった救出でした。 神様は奴隷のイスラエルを、貴重な労働力として、放そうとしないエジプトに対して、ファラオの初子(ういご)から、牢屋に繋がれた捕虜の初子、また、家畜の初子まで、初子と言う初子の命を、すべてお取りになりました。

一方、イスラエルの民に対しては、小羊を屠(ほふ)って、その血を家の入口に塗るように命じられました。 それは、死の使いがその家を過ぎ越すためでした。 神様はそのことを記念して過越の祭を行うように、命じられました。 イスラエルが奴隷から解放されるためには、それを縛っていたエジプトに、初子の命が求められ、奴隷のイスラエルにも、小羊の血に表された命による贖い(あがない)が求められました。

指導者モーセは、神様の御心を知らされた預言者でした。 モーセはイスラエルの民を、40年間、荒れ野の旅を導いて来て、人間の心が如何に自己中心で、罪に支配されているかを経験してきました。 神様に執り成しても、執り成しても、民はまた、罪を犯し続けます。 絶望しそうなモーセに、神様はモーセに勝る指導者をお与えになることをお示しになりました。

モーセは申命記18章15節で、

「**あなたの神、主はあなたの中から、あなたの同胞の中から、わたしのような預言者を立てられる。 あなたたちは彼に、聞き従わねばならない。**」

と命じました。 それから千年以上が経って、神様は約束の通り、ダビデの系譜から、神の御子を誕生させられました。 イエスと名付けられ、創造主である神様の、愛の実体を示されました。

神の御子イエス様が、人の子となられた使命は、全人類の罪を一身に負って、あのイスラエルの民が、死の使いから守られるために、過越の小羊が屠られたように、また、バプテスマのヨハネの宣言通り、

『世の罪を取り除く神の小羊となり、
人類の罪を贖われること』

でした。 その事は、モーセの命令に聞き入ろうとせず、自分の罪を認めないで、自分達を正しいとして、モーセの座に坐り、神の御子まで裁いた宗教指導者達によって、十字架に架けられ、血を流されたことによって成されました。

イエス様が十字架に架かられた時、人間は誰一人として、それが、

『人類を永遠の罪の滅びから救う
神の御子による贖いである。』

ことは知りませんでした。 ヨハネ福音書には、

『ヨハネが、イエス様の母マリアを
支えて、十字架の許にいた』

ことが記されていますが、他の弟子達は皆、自分の身の危険を感じて、逃げ去ってしまいました。

イエス様はいったい、誰だったのか、一人の義人だったのか、自分達は何の為に従ったのか、これからどうすれば良いのだろうか。 弟子達のその不安は、十字架から降ろされ、墓に葬られたイエス様が、3日目に復活され、 女性達や弟子達に復活の身体を見せて現れてくださったこ

とによって払拭されました。

その時の様子をルカは、ルカ福音書24章36節から、記しています。 イエス様は44節から、

「わたしについてモーセの律法と預言者の書と詩編（つまり、旧約聖書）に書いてある事柄は、必ず全て実現する。 これこそ、まだあなた方と一緒にいたころ、言っておいたことである。」

そしてイエスは、聖書を悟らせるために、彼らの心の目を開いて言われた。

「次のように書いてある。
『メシアは苦しみを受け、3日目に死者の中から復活する。 また、罪の赦しを得させる悔い改めが、その名によってあらゆる国の人々に宣べ伝えられる。』と。」

「エルサレムから始めて、あなた方はこれらのことの証人となる。 わたしは、父が約束されたものをあなたがたに送る。」

「高い所からの力に覆われるまでは、都にとどまっていなさい。」

と語り、命じられました。

ルカはその様子を使徒言行録の1章3節以降にも記しています。

「イエスは苦難を受けた後、ご自分が生きていることを、数多くの証拠をもって使徒たちに示し、 40日にわたって彼らに現れ、神の国について話された。 そして、彼らと食事を共にしていたとき、こう命じられた。
『エルサレムを離れず、前に私から聞いた、父の約束されたものを待ちなさい。 ヨハネは水で洗礼を授けたが、あなたがたは間もなく聖霊による洗礼を授けられるからである。』」

と言われ、8節には、

「あなた方の上に、聖霊が降ると、あなた方は力を受ける。 そして、エルサレムばかりでなく、ユダヤとサマリアの全土で、また、地の果てに至るまで、わたしの証人となる。」

と宣言されました。 イエス様はそう言われると、弟子達が見ているところで、雲に覆われて、御国に帰って行かれました。

一同はエルサレムに戻り、泊まっていた家の上の部屋に集まり、イエス様の母マリア、また、イエス様の兄弟たちと、心を合わせて熱心に祈りました。 しかし、弟子達の心には、皆、イエス様を裏切った罪の自覚が有りました。 イエス様の兄弟達には、イエス様をメシアと理解しなかった罪の自覚がありました。 自分たちの不甲斐なさにも拘らず（かかわらず）、イエス様は以前にも増して、愛を示し、ご自身の身を証して、神様からの救いの福音を自分達に託して天に帰って行かれたのです。

彼らは、自分の至らなさを示されれば、示されるほど、神様の赦し、助けと力を必要として求めました。 聖霊を求めずには居られませんでした。彼らは心を合わせて熱心に祈りました。 イエス様が天に帰られてから、弟子達は、日を重ねる毎に、悔い改め、祈りは清められて、

『一致して神様の**御心が成される**ように、
聖霊が降って来て下さるように』

との祈りへと導かれて行きました。

祈りの熱心は、自分の願いを熱心に訴えて行く事ではありません。 神様の**御心を悟る**事が出来るように、自我による思い、願いを明けわたし、繰り返し明けわたし、清められて御心を求め、**聖霊が働いて下さる事**を**待ち望む**ことです。 イエス様が天に帰られて10日目、弟子達の魂は研ぎ澄まされてきました。 その日は過越祭から50日目のペンテコステ、五旬祭の日でした。 ユダヤ教では、7週の祭り、小麦の初穂を刈り取って、神殿に持って行って捧げる、収穫祭の日です。2章1節には、一同が一つになって集まっていたことが記されています。 ここには、何処に集まっていたかが記されていません。 エルサレムで泊まっていた2階の部屋だったのか、ルカ福音書の24章53節の、

「**絶えず神殿の境内にいて、
神をほめたたえていた**」

とある事から、祭りを祝うために神殿にいたのではないかとの節もあります。 何しろ弟子達は、一つ思いで、一つ所に集まって居たのです。

すると、2章2節に記されていますように、

「**突然、激しい風が吹いて来るような音が
天から聞こえ、彼らが座っていた家中に**

響いた」
のでした。 岩波訳では、
「**五旬節の日が満ちて、**」
と訳されています。 そこには、漠然と、
『その日になった。』
と言うのではなくて、
『神様の御計画が満たされる日となった。』
と言う意味が込められています。

人間の祈り以上に、神様の御計画は、その日に意味がありました。 収穫祭のその日、神様は豊かな収穫を、お与えになろうとしていました。
新しい時代をもたらそうとしておられました。
岩波訳では、
「**烈風吹きすさぶが如き音響が、天から湧き起こって、彼らが座っていた家全体を満たした。**」
と訳されています。 ヨブ記の38章1節には、
主は嵐、口語訳では、
「**主はつむじ風の中からヨブに答えられた。**」
とありますように、嵐や大風と言うのは、神様の臨在を表します。 続く3節には、
「**そして、炎のような舌が別れわかれに現れ、一人ひとりの上に止まった。**」
とあります。

炎も、出エジプト記3章の、モーセの召命に際して、柴は、火に燃えているのに燃え尽きず、その柴の間から、神様はモーセをお呼びになりました。 この様に炎も神様の臨在を表します。
舌は言葉を語る器官です。 神様の目的がそこに有りました。 神様を信じる者は、聖霊によって、神の奥義を語れる時代が来たのです。
神様は誰もが、神様の臨在を感じ、誰もが神様が聖霊を遣わされたと言う事が、はっきりと分かる形に表して、聖霊を送って下さいました。

4節には、
「**すると、一同は聖霊に満たされ、霊が語らせるままに、ほかの国々の言葉で話しだした。**」
とあります。 弟子達は全身全霊を捧げ、ただ神様の御心に従う心で一つにされていました。
弟子達は、神様に**明け渡し切った**のです。
明け渡しが出来**て居なければ**、聖霊は彼らの**心に入**り、**霊の導き**をお与えになることは**出来ません**。 それは、決して夢遊病者のようになると言う事ではありません。 聖霊は、相手の意志をとても重んじられる方です。 弟子達が、
『心から神様に**従いたい**、**用いられたい**。』
と願ったところに、聖霊は一人ひとりに、臨まれました。

すると言葉の奇跡が起こりました。 しかし、それは決してあの言葉が混乱した、バベルの塔の様な事態ではありませんでした。 聖霊は秩序の神様です。 弟子達がそれぞれに、あっちからもこっちからも叫びだして、何がなんだか分からないと言う状態ではありませんでした。
それは人々の耳にはっきりと分かり、理解出るように聞こえたのです。 聖霊が聞く人の心にも、働き掛けて下さったことが、示されています。

5節を見ますと、
「**さて、エルサレムには、天下のあらゆる国々から帰ってきた、信心深いユダヤ人が住んでいたが、この物音に大勢の人が集まって来た。そして、だれもかれも、自分の故郷の言葉で、使徒たちが話しているのを聞いて、あっけにとられてしまった。**」
とあります。

烈風吹き荒ぶが如き音は、人々を、何事だろうかと、音の出たところに引き寄せました。
集まって来た人々の耳には、弟子達の言葉が、懐かしい、かつて住んでいた地方の言葉である事が分かりましたが、それだけに不思議でなりません。
「**集まった人々は、驚き怪しんで言いました。『話しをしている人たちは、皆ガリラヤの人ではないか。』**」
ガリラヤは強いなまりがあったそうです。 服装から分かったのか、強い**なまり**というのは、外国語を話す時も、残るものです。 それで分かったのでしょうか。 唯、ガリラヤの人と言う言い方は、すこし、見下げた気持が入っています。
『ガリラヤの田舎の人達が、行った事も無い国々の言葉を、何故話せるのだろうか。
自分達はそこで生まれて、その地の文化を身に付けているのだ。 しかし、その故郷の

言葉を、ガリラヤ人から、聞かされるとは、
不思議で、驚く以外にない。』
と言う訳です。

9節から、その地名が挙げられています。
わたし達には馴染みの無い地名ですが、ユダヤ人達は、歴史的に、バビロン捕囚でメソポタミアに連れて行かれました。 彼らは捕囚後に、メソポタミアよりも東方の、パルティア、メディア、エラムまでも移住したのです。 カパドキア、ポントス、アジア、フリギア、パンフィリアは小アジア地方の都市であり、エジプト、リビアはアフリカ北部の都市です。 クレタは地中海の島、アラビアにローマと言う具合に、そこには、かの地方に住む人々の全世界が記されています。

聖霊は、弟子達をこれから、全世界へと導き、共に働いて、彼らがイエス・キリストの復活の証人となって、語り伝える勇気と力を与えて、大きな収穫を与えて下さるのです。 聖霊が収穫祭のこの日に、弟子達の群れに降って来られたのは、これからの福音宣教の収穫の徴(しるし)でした。

集まって来た人々は、11節で、
「**彼らがわたしたちの言葉で神の偉大な業を語っているのを聞こうとは。**」
と言っています。つまり、
『ナザレのイエス様、十字架に架けられ、復活されたイエス様こそ、メシア・真の救い主である。』
と語っていることに、人々は皆、驚き、惑い、
「**いったい、これはどういうことなのか。**」
と互いに言い合ったのでした。

一方、
「**あの人たちは、新しいぶどう酒に酔っているのだ。**」
と言う人達もいました。 しかし、その日、ペトロが聖霊に満たされ、
『イエス様こそ、メシア・救い主である。』
と語った事によって、三千人の人々が救われたのでした。 ここに教会が誕生し、聖霊の助けと導きによる、福音宣教の時代が始まりました。

神様の願い、イエス様の願いは、一人でも多くの人が御救いを信じて、救われることです。そのためには、宣べ伝える人がいなければなりません。 それと共に、聖霊の助けと導き無くして、福音は伝わって行きません。 教会はイエス・キリストの救いの福音を語ってこそ、教会です。 どうしたら、一人でも多くの人に福音を伝えることが出来るのでしょうか。

一人では出来なくても、互いに聖霊を求めて祈り合い、知恵を出し合って実行して行く所に、聖霊も働いてくださいます。 皆さんが今、そんな思いで自分に出来る事をしてくださっている。この事に、心から感謝します。 わたし達は現状を嘆かず、聖霊の助けと、導きを信じて、地道に、福音を発信して行こうではありませんか。

お祈りをいたします。
憐れみ深い天の父なる神様

イエス様の十字架の贖いと復活により、
神様の御救いは全ての人に開かれ、
わたし達も、その御救いに与ったことを心から感謝いたします。

救われたのは、その御救いをまた、語るためです。 そのために教会を建て、聖霊が助け主となって、働いていて下さる事を感謝します。
わたし達は現状を嘆かず、互いに祈り合い、助け合って、福音を語り続ける教会でありますよう、御聖霊の助けと導きをお与え下さい。

お一人おひとりの上に聖霊の豊かな霊と力を、また、祝福をお注ぎ下さい。

尊い救い主イエス・キリストのお名前によってお祈りをいたします。

アーメン。